

## <第123回 国際ARCセミナー（鴨木年泰氏）レビュー>

# 文系パソコンオタクの学芸員による手作りデータベースの到達点と今後の展望

## ——美術館の学芸業務を合理化・活用できるデジタルアーカイブの運用の現場から

北岡 沙映(立命館大学大学院文学研究科)

E-mail [lt1216vi@ed.ritsumei.ac.jp](mailto:lt1216vi@ed.ritsumei.ac.jp)

### 概要

本稿は2023年10月11日に行われた「第123回国際ARCセミナー」における鴨木年泰氏<sup>1)</sup>ご講演について報告するものである。本講演で、東京富士美術館における収藏品データベースの活用事例と展望について述べられた。以下、その内容に従って紹介する。

### 発表内容

#### ジャパンサーチとの連携

2023年8月25日、東京富士美術館は内閣府に設置されたデジタルアーカイブジャパン推進委員会及び実務者検討委員会から「デジタルアーカイブジャパン・アワード<sup>2)</sup>」を受賞した。ジャパンサーチのギャラリー機能を使用したオンライン展覧会の開催、APIを活用したデジタルキャプションを展示室に設置し、収藏品データベースを学芸員の業務と連動させ、効率化を図っているという点において評価された。

#### ジャパンサーチとの連携による効率化

#### おうちミュージアム

東京富士美術館は2022年9月から約1年にわたる建物の維持管理に関わる大掛かりな工事による長期休館となった。その長期休館中はリアルな展覧会を行うことが不可能であるためオンライン上での積極的な活動ができないかという考えからこの展覧会を行う運びとなった。

#### おうちミュージアムの仕組み

ウェブサイトに載せたメタデータをジャパンサーチにおとし、ジャパンサーチ上に連携した収藏品のメタデータ情報を使い、ジャパンサーチのギャラリー機能を活用しオンライン展覧会を制作した。

また、過去の館蔵7つの展覧会をオンライン展覧会として再現した。オンライン展覧会の告知をリアルな展覧会同様にポスターにして主に東京の多摩地域を中

心に告知を行った。このポスターには、QRコードを掲載しており、QRコードをスマートフォンで読み込むとジャパンサーチ上の機関ページに飛ぶ仕組みになっている。また、過去の展示会の際の画像やごあいさつ、展示構成など当時使用していた展覧会情報を基に作成されている。

#### 収藏品管理とデータベース

代々、受け継がれてきた紙の台帳が現在の収藏品データベースに切り替わってきている。詳細な作品情報については、作品カードを使用した情報共有が行われていた。しかしながら、紙の媒体では最新の情報を把握することが難しく、学芸員としての業務効率化のためにデータベースを制作する運びとなった。

このデータベースの特徴は、作品を管理するだけではなく、過去に開催された展覧会のデータの管理の役割も担っているという点である。

#### 収藏品データベースの構造

作品を管理する頁には、作品の基本的な情報である制作年などの情報を入力し、所蔵番号で美術品を管理している。この所蔵番号が作品を管理するユニークIDとなっており、その後ろにあるアルファベットで分類分けをしている。1つ目のアルファベットが油彩画、洋画などの分類を意味し、2つ目のアルファベットは作品の位置付けられる国名を意味している。また、作家の情報を入力する頁もあり、作家ごとにIDがつけられ、作品と作家が結び付けられる形となっている。

また、展覧会のデータを記録する頁があり、東京富士美術館で開催される企画の種類ごとの分類と他館への貸し出しを展覧会のレコードとして記録している。つまり、東京富士美術館で開催する企画展の規模や種類による種別があり、貸し出し先の展覧会情報を記録している。また、東京富士美術館の収藏品による企画展を他の美術館で巡回する場合は「企画協力展」という位置づけで他館での展覧会として分類し記録する。

常設展に関しても同様に展覧会として記録する。

展覧会ごとに ID を付けて、最初の数字が展覧会の種別を意味し、次の 8 桁は展覧会の最初の開催日を意味し、最後の 1 桁は同じ日に開幕した展覧会の入力順や優先度を意味している。

出品管理のテーブルに展覧会の ID を入力し、所蔵番号を入力すると、この 2 つが紐づけされ、展覧会への出品状況が確認できるという仕組みとなっている。

東京富士美術館公式ホームページの収蔵品詳細ページにはデータベースから書き出されたメタデータが貼り付けられている。また、出品歴に関しては、プルダウンメニューとなっており出品歴の情報が表示される仕組みとなっている。

したがって、東京富士美術館のデータベースは作品の情報を記録するだけのものではなく、この記録を付けることが美術館学芸員としての基本的な業務の一つとして位置付けられている。

### 展示室内でのデータベース活用

展覧会での作品のキャプションには、作品情報についてのみ記載しており、その他の情報については QR コードを読み込むと館公式ウェブサイト上の収蔵品情報ページを表示し、より詳細な解説や出品歴の情報を見ることができる仕組みとなっている。このことにより、過去の出品歴から過去の展覧会について知ってもらえることができ、様々な情報の可能性が広がっていくことを期待している。

### 作品タグについて

作品についているタグには、表面上に所蔵番号が刻印されており、小型の端末(ハンディターミナル)で読み取る。

収蔵庫に棚番号が記載され、作品に取り付けられた IC タグをハンディターミナルで読み込んだ後、棚番号のバーコードを読み込むと、作品が棚番号の棚に置かれたという記録になる仕組みとなっている。棚番号の一桁目は本館か新館、二桁目は何番目の収蔵庫、三桁目はラックのアルファベット、四桁目は何列目、五桁目は何段目かを意味している。

この機能を使用することにより、美術館内でどの棚に置いているかという記録からどの美術館に貸し出しされたかまでの一貫した作品移動の詳細を見ることができるという仕組みとなっている。

### デジタルキャプション

現在、印刷されたキャプションとデジタルキャプションを併用した実証実験が行われている。デジタルキャプションは、電子棚札の機材を使用しデジタルの情報を表示している。作品の情報の表示の仕組みについては、ジャパンサーチの API を活用し、ジャパンサーチ上に出ている東京富士美術館の収蔵品情報の API を読

み込み、自動的に表示する仕組みとなっている。

また、収蔵品データベースを更新したと同時にジャパンサーチ上のデータも更新され、デジタルキャプションの内容も自動で切り替わる仕組みとなり、一貫した情報更新をすることが可能となる。

### 発表の回顧と所感

本講演では東京富士美術館の収蔵品データベースにおける仕組みや役割、その活用について言及された。

データベースは作品の情報を記録するだけのものではなく、過去に開催された展覧会のデータの管理など学芸員の業務の効率化を図るという重要な役割も担っている。また、デジタル情報だけでなく、アナログのものも併用し、様々な取り組みを行っていくことの重要性を感じた。データベースを最大限活用し、展覧会や作品管理において重要な役割を果たしているという点においても非常に興味深いものであった。

東京富士美術館のように、収蔵品データベースは作品管理にとどまらず、美術館のさまざまな活動を活性化させるものであり、今後さらなる応用が進むことが期待できるだろう。

[注]

- 1) 公益財団法人 東京富士美術館 学芸課長
- 2) Japan サーチ <https://jpsearch.go.jp/daj-award>